



子どもへの無理解



菊池ふじの

外はうらかな春です。

○
浩君は四才の男の児で、この四月から幼稚園に通うことになりました。浩君には二才の弟があります。

浩君のお母さんは、浩君が幼稚園に通うようになってからはとても忙しくなりました。いままでは、パパを送り出したあとはのんびりと、子どもたちと遊んだり、洗濯をしたり、家の片付したりして過していたのが、浩君が幼稚園に通うようになってからは、浩君を送り出すこともしなければならぬし、自分も身仕度をして浩君を連れ出さなければなりません。電車が混むので、下の弟には留守番を頼んで、その人にあずけることにしているのです。ですからパパひとりを送り出していたときよりも何層倍かの忙しさになったわけです。けれども浩君のお母さんは、それがちっとも苦

労ではありませんでした。苦労どころか、この世の幸福者にさえ思えて、毎日毎日を楽しくはりきって送り迎えをしていました。

浩君の家は東中野でした。幼稚園に通うのには、中央線や山の手線を使わなければなりません。朝のラッシュアワーなど、電車から降りようとすると、浩君の帽子は人混みの中にもまれて落ちそうになります。帽子についているゴムのあご紐がのどにかかると、帽子は危うくも浩君の身体からは離れないではいますが、帽子は、ぎっしりつまった人と人との間に残っているし、浩君は降りなければならぬしというわけで、帽子の存在は下車どきの一苦勞でした。そこで浩君のお母さんは考えました。帽子無しでは日射病にかかるという時節でもないから、ここ暫くは無帽でということにしました。

一方、幼稚園では午後のおかえりどき、「○○○の組おかえ

り!!」の声がかかると、思い思いのところを遊んでいた子どもたちは、一せいに遊びをやめ、急いで遊びの道具を片付けてお部屋へはいってきます。そして携帯品置場に自分の持物をとりに行くのがまじりです。浩君も、あさ、帽子を被らないで出たことはすっかり忘れて、みんなといっしょに所持品を取りに急ぐのです。

あるときは帽子が無いので泣き出してしまい、先生にだめだめ頂いたこともありました。あるときは、帽子掛けまできて帽子の無いの気がついてすぐごと引きあげたこともありました。しかし浩君は、おしまいには帽子のないことは知っていても、やはりみんなといっしょに帽子掛けに急ぐようになりました。でも長い廊下の途中までくると淋しそうな表情をして、そこいらにふらふらしていて、持物をもってお部屋へ帰るみんなの波といっしょに自分のお部屋に戻って、お帰りにするのでした。(註・おべんとうはまだないので所持品といつては帽子ぐらいです)

ある朝のことでした。お母さんは、この頃は帽子を被らないで出ることをすっかり忘れて、紺のラシャの帽子を浩君の頭におきました。途端に気がついて

「ああ帽子は被らないで行くのだったわね」

と言って、その帽子を取り去ろうとしました。

ところが、浩君は両手でしっかり帽子を抑えてどうしても取ら

せません。お母さんは

「ほらまた新宿で降りるとき、帽子が人の間にはさまって降りられなくなるじゃあないの、おいていきましょう」

と無理にも取ろうとしましたが、浩君はどうしても離しません。お母さんは取ろうとします。

遂に浩君は泣き出してしまいました。

朝の一分はまことに貴い時間です。出掛けの時間は迫ってくるし坊やは泣くし喧騒の一時をくりひろげました。お母さんの声はますますかん高くなりました。

お祖母さんの助言もあって、遂に母親は浩君の主張に折れ、あわてふためいて浩君の手をひいて出ていくのでした。

子どもには子どもの世界があるのです。子どもにも、子ども相当の苦労や悩みがあるのです。この年令の子どもでは、そして特に内気な子では、このことを口に出してはつきりと人に伝えるすべを知らないのです。周囲のおとなはどうかすると、子どものデリケートな心のうごきには気がつかないことが多いものです。

母親は浩君の主張には折れましたが、果して浩君の心の裡を察知しての上のことでしょうか。それとも、その場の喧騒と時間の切迫に負けたのでしょうか。

○

浩君は五才になって、幼稚園の最年長の組になりました。けれども浩君には他の子どものように、心ゆたかに、幼稚園をわが世の春と楽しむというゆとりはみられません。

ある日のこと、赤や青や黄色や緑の、頑丈なそして奇麗な自動車は幼稚園の各室に新調されました。浩君の組にも青色の自動車が配られました。実際に人が乗れて走る自動車ですから、男の児たちは狂喜して自動車のまわりに群がりました。僕が、僕が、といて先きを争う小さな手が交錯して、危うく喧嘩になる状態になるのですけれども、この頃になりますとさすがです。誰かが、「順番にしよう」と言い出して、危期を解決してくれるものです。こんな中にも浩君は、一間ほど離れたところにこにこして見ているだけで、このるつぽの中にはいろいろとはしないのです。組木が揃えられたときもそうでした。どのようにでも組み立てられる棒と、いくつも穴のあいている積木とが組になっているのですから、いろいろさまざま、何でも思うままのものがでできるのです。子どもたちは、飛行機よ、トラックよ、さてはおみこしだの、でんでん太鼓だのと工夫構成に夢中になっているのですのに、浩君は、これにも手を出そうとはしないのです。

新しい遊具が備えられても、珍しい玩具ができて、他の子どもたちはとびついて夢中になって遊ぶのに、浩君はとびつくことも

も夢中になることもなく、いつも人の遊ぶのをそのまわりで眺めているだけなのです。年令も早生れ、気質も内気で、何かに幼く自信がないせいなのでしょうか。

そうこうしているうちに初夏の候となり、世間の流行が幼稚園にも反映してか、ホッピングが五六基、幼稚園にも備えられました。子どもたちは、非常に興味を持ち、ホッピングが空いてさえいれば使おうとしています。全身を一本の鉄棒に託して、軽々といくつまでも上手に跳べる子どももいれば、落ちて落ちてもおめげずに跳ぼうとする道風型の子どもなど、幼稚園のお庭はホッピングの大流行となりました。しかし、浩君はホッピングにはさわろうともしませんでした。これほど子どもたちには興味があるのに、浩君にはどうして興味が無いのでしょうか。浩君の眼には、これだけ大勢の子どもたちが、ホッピングに打ち興じている姿は映らないのでしょうか。

ある朝のことでした。浩君は早く登園しました。幼稚園中で二人か三人しかきていません。浩君は大急ぎでホッピングを取りにいきました。そして廊下の壁に背中をつけて一生懸命にホッピングに体重を乗せようとしていました。体が乗ることは乗っても、一つ跳ぶと落ちてしまつてなかなか二つ三つと続きません。そのうちに登園者が漸く多くなりましたら、浩君はホッピングを元の

ところへ返してしまいました。

浩君のお母さんはこの流行ぶりを見て、早速家庭にもホッピングを揃えました。パパもママも浩君をできるようにしてあげようとして一生懸命です。両親が代る代る跳んで見せたり、浩君に手をかして支えたりしていました。そのうちに浩君も四つ五つと跳べるようになりました。浩君は明るく元気になりました。幼稚園でも友だちの前でも、ホッピングが空いていれば跳ぼうとしてホッピングを手にするようになりました。

この頃、このホッピングの流行に警告して、医者側からその弊害が夕刊紙上に掲載されたことがあります。浩君のお母さんはこの記事に目を通したのでしょう。その翌日「ホッピングは胃が下るから」といってさっさと止まってしまうました。

漸く七つ八つと跳べるようになって、みんなの仲間入りができそうになり、浩君の精神も表情も明るくなってきはじめてのに惜しいことに!!

○

浩君は絵が下手でした。したがって絵をかくことを好みません。いや、絵をかくことを好まないから下手なのでしょうか。どちらでしょう。浩君の両親もこのことは知っていました。ですから、どうかして人並みの、少しはみられるような絵をかくように

してやりたいとは、朝に夕べに希っているようでした。

両親のこの気持の一つのあらわれでしょう。浩君は、いつの頃からか絵の先生に通うようになりました。日曜ごとにパパかママにつきさわれ、大きな紙ばさみを下げて絵の先生に通う浩君の姿には何とはなしにいじらしいものが感じられるのです。絵の先生に通うには通っても、一週一度のことです。その間の日の浩君の、家庭における描画の生活はどのようなものなのでしょう？

一月のある日曜日のことでした。日頃は勤めに忙しいパパですが、久しぶりにのかな日曜だったらしいのです。南側の陽当りのよい縁側に机を出し、パパもママも紙を拡げて絵をかいていました。絵がかきたくてかきたくてたまらないという両親でもなく、まったく浩君を描画の生活に誘導しようという意図としか見えません。パパの絵は、滑り台に大勢の子どもが滑っている絵。ママの絵は、ジャングルで大勢の子どもたちがジャングル鬼をしているところでした。どちらも、なかなか手のこんだ絵です。

自分の好きなものをなんでもいから描こうという話しあい、机が持ち出されたのでしょうのに、そばにいる浩君はまだ何かいてはいません。パパとママの絵をみて浩君は、なおかくなかったのではないのでしょうか。

その場の雰囲気は浩君の手をつぐんでしまったのでしょうか。